

# 「すぐに使える教材を使った ジェンダー平等教育・実践者養成集中講座 を受講して」

2009年度受講生 加藤ひとみ

「教材」を使った「ジェンダー」平等教育というキーワードに誘われるように、名古屋から「のぞみ」とびのびのってしまった。

おぎやあと生まれたその瞬間、「女の子だからピンク色の産着だね。」「こんどこそ男の子だったわね。」と、どちらも出産直後の私の周りにとびかかった言葉だ。こうしてジェンダーは生まれた瞬間からひとりひとりの人間を規定し、区別したうえで、知らず知らずその心からめとつていく。そのことで、こどもたちが自分の視野を、行動を、未来を、狭く小さくしないで生きてほしい、そう考えて活動してきた私にとって、こどもたちがジェンダーに気づくことのできる教材ができたのなら、それはもう是非見たい！そのプログラムを体験したい！と思ったのは当然のなりゆきだった。

小学生のためのDVDを使ったプログラム、3〜8才のこどものための、パネルシアター・手遊び・ロールプレイなどを取り入れたプログラム。どちらも発達段階をよく考えてつくられていた。私は、このプログラムはこどもたちにシャワーのように何度も浴びてほしいものだと思う。こどもに限ることではないが、

心がやわらかくて成長しているときは、感じとること、受けとることもそのたびに変化していくからだ。

こどもたちが大好きな絵本を何度もくりかえして読んでほしい。がるのはなぜなんだろう。こどもたちは、このプログラムを何度も運んでくる大人を決して拒みはしないだろう。大好きな絵本を安心して大人と味わうように、このプログラムのなかで、遊んで、自分の気持ちを知っていき、友達の声をききながら、プログラムをその子なりに自分の力にしていくだろう、そう思う。

さて、よい教材はできた。あとはこれを運用していけるかどうかは大人の問題だ。学校の授業のなかにこのプログラムを浸透させていくのはなかなか骨の折れる仕事である。ジェンダー規範が抑圧を、さらには暴力を生み出していく構造は目には見えないわかりにくいものであるために、プログラムの必要性が大人の心のところまで届きにくいと思われるからだ。

こどもに携わる大人はまずはこのDVDだけでも見てほしい。メモもとらず、自分の内なるこどもにつながって、その目でただ見てほしい。自分の内なるこ

どもとつながって感じたことを、意識して、社会を俯瞰する目とつなげてほしい。そのうえで、こどもが育っていく社会をつくっていく大人として、人とつながってほしい。それが最初はこの講座に参加した私の思いである。そんな思いを胸に抱きつつ、主任児童委員をしている私としては、地域ではそのつながりを糸口に動いてみようと思っている。スイスのアリス・ミラーという心理療法家はいう。

—不安は伝染するが  
勇気もまた伝染する—

大阪・高槻でSEANの皆さん、そして参加者の皆さんには「教材」だけでなく「勇気を」もらって帰ってきた。巷ではインフルエンザの伝染の話で持ち切りだが、勇気というの伝染病のウイルスならもつとほしい。SEANさんうつつして♪うつつして♪と思っている。

「ジェンダー」「平等」そういう言葉をはっきり打ち出して、ビジョンに向かっていく、そして、それを平らかな言葉で地平に広げていく、それを確かに実践しているSEANにリスペクトをこめて。